

虹

妥協せず ちよとずつ

①65 一条の紐に心を込めて



帯締めを作る藤岡さん

ほんの小さなものが全てを決めてしまうことがある。仏像の瞳や、文章の句読点の位置、ダンサーの指の動き。全体の中では些細なことが世界観を変える。和装なら帯締め。帯の上を走る1本の線は強い。

着物の上で帯締めが占める面積はごくわずかだ。幅は太いものでも1.6倍程度、長さは130~150センチ。その中で複雑な柄や淡い階調が表現されている。一条の紐にしか過ぎないものが着物、帯、帯揚げとどう組み合わせるかで、着る人の印象を左右する。

三重県の伊賀地方は、帯締めの産地として知られる。手組みのシェアの8割を占める。南砺市出身の藤岡かほりさん(46)もその作り手だ。「一人前とはまだまだ言えないけれど、いえ、これからとも言えないかもしれません」と笑う。

伊賀街道に面した趣ある藤岡組紐店の店内。高台と呼ばれる作業台には放射状にピンと糸が張られている。着物姿のかほりさんが右から左に、左から右にとリズミカルに60個近い糸玉を組み替えていく。ちよとずつ、ちよとずつ。組み目が模様を作っていく。ヘラで組み目を叩くトントンという音が音楽的に響く。綾書きと呼ばれる秘伝の設計図も楽譜のようだ。

店で扱う帯締めは3万円程度からと高額だが、作るのに数日かかる。1本売れても、時給に換算すると最低賃金程度にしかならないものもある。それでも「機械の大量生産のものとは全く違います。手組みだからこそ出る伸縮性と締め心地があるんです」と話す。自信作はまだない。「自信作ができたと思っちゃうと、そこで止まりそうで」

◇

子どもの頃のかほりさんにとって、地元の旧井波町は退屈だった。家の周りには田んぼしかない。「今なら富山の良さは分かるし、残っている同級生もうらやましく思う」。しかし、当時はどうにか出て行きたい場所だった。

青年海外協力隊の存在や通訳という仕事を知り、海外で働いてみたいと考えていた。大阪にある大学の外国語学部に進学したが、当時は就職氷河期だった。就職活動では海外に支社がある会社を中心に受験したが、思うようにはいかない。書類選考でほぼ落ち、面接に進んでも緊張でガチガチになった。卒業式を迎えても、内定は得られなかった。

将来の当てはなくても、まだ地元には戻りたくない。「あっけらかんとした性格なので」と、なんとなく気もしていた。そのまま大阪でアルバイト生活を送っていたところ、大学で世話になった教授が兵庫の葬祭会社を紹介してくれた。

ぼんやりと夢を見ていた海外での仕事とは違ったが、葬儀の仕事はやりがいがあった。故人の人生はそれぞれ異なり、式の形も全く違う。遺族の故人に対する思いをくんで、プランを提案することには独特の責任と面白みを感じた。悲しい思いをしているはずの遺族が「ありがとう」と声を掛けてくれることには、特別な達成感があった。

しかし、10年近く勤めると慣れが出てきた。慣れで悲しみの渦中にいる人に向き合っていていいわけがない。同じ仕事を続けるべきかと迷うようになった。「偉くなりたいわけじゃないんです。ただ、心を込めた仕事をしたい。自分にできることが他にある



「春景立山」西淳子

のかも」と揺れていた。

クリスマスが過ぎた頃、職場から近いデパートに立ち寄った。帰省する前に何か土産を買いたかった。フロアの一角に、職人の技を紹介するコーナーが設けられていた。年の瀬ならではの喧噪の中、落ち着いた色や和柄の美しさに惹かれ、ふと帯締めを手を取った。着付け教室に通ったことがあり、友人の結婚式には振袖で参列していた。和装には関心はあった。

男性がスーッと近寄り、声をかけてきた。帯締めを作り、販売している藤岡組紐店の4代目、潤全さん(45)だった。帯締めの説明は次第に職業観の話に移った。「帯締め作りは曾祖父の代から続いてきた家業。受け継ぐことを誇りに思っている」と言う。

目がキラキラして見えた。

かほりさんは次の日にも同僚を誘って、訪れた。仕事に打ち込めないでいる状況に刺激をもらいたかった。結局、会期の半分は足を運んだ。手作りの帯締めは高価で、おいそれとは買えない。申し訳ないので帯締めの技術を生かしたストラップを買った。

「何度も来る人は珍しい。変な人だと思った」と潤全さん。催事の会期が終わった後も、2人は会った。富山でも実演販売したことがあり、富山出身の着物好きのタレントが店の帯締めを愛用しているという。好きなインドカレーの話でも意気投合した。縁を感じた。3年ほどして2人は結婚した。

◇

歴史的な街並みが残る伊賀に移り住んだ。潤全さんからは「外に勤めに出てもいい。家業を手伝ってもいい。どちらでも好きを選んで」と言われていた。長年勤めていた職人が、高齢を理由にちょうど退職し

ようとしており、新たな人手が必要なタイミングだった。かほりさん自身も伝統に挑戦してみたかった。

帯締めは細い絹糸を組んでいく。最初は当然ながら難しい。糸の扱い方も、持ち方も分からない。ちょっとした組み目のずれが、後にまで響いていく。夢にも糸や高台が出てきた。1日に進められるのは、50~60センチ程度。ミリ単位ながら着実に模様が浮かび上がっていくのは面白かった。

最初に組み上げたものは自分の手元に残し、次に作ったのは実家の母に贈った。「こんな作れるようになったんだね」と喜んでくれた。商品として店頭に出せるようになるまでには2年かかった。

指導してくれた義母、恵子さん(70)は

「私は行き当たりばったりで回り道してきたけど、かほりさんは根本から理解しようとする。一つ一つ丁寧に積み重ねていく。ものづくりはこんな真面目さが大切」と言う。

恵子さんは妥協しない。伝統工芸士に認定されているのに、まだうまくならない。色の取り合わせも粘り強く考え抜く。何十年やっても、慣れでは仕事をしていないのだ。かほりさんは「一番身近にいいお手本がいる」とまぶしく見上げる。

女性工芸家だけで作るグループにも参加した。他ジャンルの工芸家とも協力し、これまで培った技術を使ってタペストリーを作った。そうやって技術を応用していくことで自信は深まった。帯締めの端に取り付ける房を材料にしたイヤリングを商品化した。帯締め作りは、いくらでも工夫と努力ができる仕事だと感じられた。

◇

コロナ禍が襲ってきた。店の収入の多くは、デパートの催事に頼っている。対面することができなければ、馴染みの客との接点はない。実店舗がある伊賀にも観光客が訪れない。収入は一気に細った。

オンラインショップを開設した。「画像から伝統の柄が簡単にまねされてしまう」という心配の声もあったが、「うちがオリジナルだと先に示すことにもなる」と踏み切った。インスタグラムも始め、発信はかほりさんが担当した。「写真を撮るのはうまいし、帯締めがどう見えるか分かっている」と潤全さんは言う。多くはないが、ネットを通じて初めて買うという客も出てきた。「伝統を大切にしていけるのはもちろんだけど、新しいことを加えていく転機にもなった」とかほりさん。

デパートの催事は以前ほどではないが、開かれるようになった。SNSでの発信のこもりもあり、「今日はこれを着けて出掛けました」とコメントが付くようになった。

新年には、晴れ着をまとった人が初詣に出掛ける。自分や家族がこれまで心を込めて作った帯締めを使うだろう。そう想像すると、かほりさんの背筋は伸びる。

「着物や帯が小説なら、帯締めは俳句」。取材の中でかほりさんの義母、恵子さんはそう言いました。わずかな幅の中でどう表現していくのか。確かに短詩系文学と通じ合うものがあります。着物人口は減っているといいますが、和装にしかない美しさを否定する人はいないでしょう。その美しさの真ん中に帯締めはあります。



「虹」第7巻 発売中

最新刊の第7巻「虹 補助輪をはずした日の風」は、北日本新聞連載の121~140回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時~午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見・ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

FAX 0766-25-7773

mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は2月1日(水)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社
メディアビジネス局